

チャールダーシュの 形成とその特性

大澤 慶子

1. 研究目的及び方法

ハンガリーはヨーロッパの中でも舞踊文化の豊かな国で、周辺のバルカン諸国が鎖状円形舞踊を中心とするのに対し即興性をもつ自由な形式のカップルダンスが多くみられる。György Martin⁽⁴⁾によれば、ハンガリー舞踊は①古い様式 (A léánykörtánc 少女の円形舞踊, A pásztortánc 牧夫舞踊, Az ugrós 跳躍舞踊 legényes 若者の舞踊, A régi páros tánc 古いカップルダンス), ②新しい様式 (A verbunk 募兵舞踊, A csárdás チャールダーシュ) となる。今回はこの中からハンガリー舞踊の代名詞にも使われているほどのチャールダーシュをとりあげ、その形成発展の過程をたどって不明な点をさぐり、さらに実態を把握する。そうすることで、“チャールダーシュ”の正しい位置づけが出来、さらにハンガリー人と踊りとの関係を考えることができるのではないかと考える。本論ではより多くの人々が踊る機会とみられる結婚式にみられる踊りを参考事例にした。

2. 風土、歴史的背景

人口1,071万、面積93,033km² (日本の約4分の1, 1979) Fig. 1 にみられるように5ヶ国と国境を接している。国土の3分の2は低平な盆地で農耕及び牧畜を主としている。ハンガリー人(マジャール族)はウラル山脈付近から移動してきてほぼ9世紀に今の地に定住した。15世紀後半、マーチャーシュ王Mátyás 位1458-1490)時代には、東ヨーロッパ随一の交易地として栄えたが、13世紀のモンゴルの侵入、16世紀から2世紀にわたるトルコの占領、17世紀末のオーストリア・ハプスブルグ家の支配、第一次、二次大戦など、常に他民族国家からの大きな抑圧を受けている。言語は日本語と同じウラル・アルタイ語系のハンガリー語

が公用語である。

以上の様に、マジャール民族の起源、言語などから、さらに音楽からもアジア的要素が認められるが、ヨーロッパという地に長く位置しており異民族との混血が進んでいるため、アジアとのつながりについては今後の大きな学問的課題として残されている。

3. 踊りの語源

ハンガリー語で舞踊に対する語は, tánc, táncol である。ゲルマン語からきたものでおそらく13, 4世紀以降に用いられたのではないかとされる。それ以前は, lejteni ホップ・ステップ, ugrani 跳躍などの語が使われていた。元来この táncol の同類語は, tombol いらいらしてあばれ回る, (馬が) はね回る, toporzékol 足で踏みつける, であった。

ここで興味深いのは、農民の間では, táncol の語は使われず、そのかわりに, karikázó 円をつくる, lepő ステップ, botoló 棒を持った, verbunk, cardás などと呼ばれたことである。

4. チャールダーシュの形成

チャールダ <csárda> という語は、1775年頃からみられ、屋外、大平原、街道などにある“居酒屋”のことをさし、馬車や車を方向転換したり、飲物や軽い食事をする所のことである。そして、チャールダーシュというのは、もともとは「日曜日に、低級な居酒屋で農奴(の娘たち)によって踊られたもの」で、それを貴族たちが社交舞踊としてとり上げ、チャールダーシュ“居酒屋の踊り”と名づけた⁽⁵⁾というのが一般的な説である。他の資料では、1840年2月13日に首都ブタペストの集会場⁽⁵⁾で24組のカップルの貴族たちが、古いハンガリーの民俗舞踊を csárdás という新しい名のもとに踊ったのがはじまりとされ、また、1842年フェレンツ・リストが、舞踏会で自分がいなかでみたハンガリー風の踊りを見せてくれるよう申し出たのに応えて、ある地方貴族の兄妹がぶどうの収穫祭で踊る活気のある踊りを披露しそれが人気を博し一気に国中に広まったとの説もある⁽⁶⁾。

いずれにしても踊りそのものは、村々で日曜日に踊られていたものである。チャールダーシュという名称にはやや軽蔑した意味合いが含まれているようだが貴族たちの間でも非常にもてはやされたとしている。これには社会的背景もあった。というのは、当時(1848年頃)ヨーロッパ中は革命の波間にあり、ハンガリーもその例にもれずその気運に盛りあがっていた。このあたりのことについては、Rdcsi Vályi が述べている。当時ヨーロッパ一帯にはワルツが広まっていたのだが、ハンガリーでは、オーストリアの支配下だったため、その抑圧に対する反動として、ワルツは心よく受け入れられなかった。そのかわりにフランスのカドリールの影響を受けたハンガリー風円形舞踊

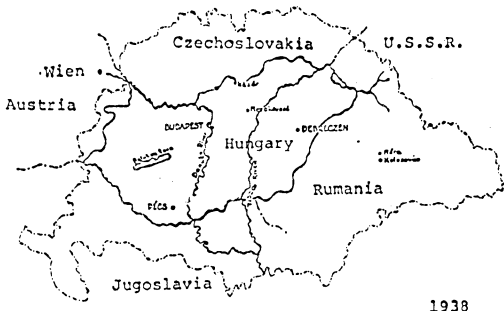


Fig. 1

körmagyar が人気を集めた。これとはほぼ同時に、より自由で規制の少ないハンガリー独自の踊りとしてチャールダーシュが登場しその栄華をきわめた。従って、フランスやドイツにおけるワルツと同様の役目を果たしたが、ハンガリーにおけるチャールダーシュだったとしている。

5. チャールダーシュの構造と技術

全体は緩急の2部分で構成される。だがもともとはもっとゆるやかな部分が前にひとつついていた。⁽⁸⁾両者は別々の踊りとして独立的に考えられるが、相互に補い合う関係にある。この組み合わせという構造に、中世の行列カップルダンスとルネッサンス期にひろがった回転カップルダンスが組み合わさっていくヨーロッパ舞踊史の基本的姿を認めることができる。両者に共通するのは、ステップが中心でそれらの組合せ、及びフォーメーションにも即興性がみられることである。カップルは、1. 離れている 2. オープン 3. クローズドの3種のつながり方をし、リードは常に男性の役目である。

ゆるやかな部分 lassú は、テンポは $\downarrow = 120$, 2拍子で、偶数拍にアクセントがあり、チャールダーシュステップが行われる。下行、上行アクセント2種があり、膝の曲げ伸ばしやそれらによる胴体のリズムカルなゆれがみられる。全体としては、水平的動きが多く、抑制的で、滑らかで威厳ある感じがする。これに対し、早い部分 friss は、 $\downarrow = 160-240$, 裏打ちがあり、跳躍、回転、施回、かかとをうち合わせる、踏みつける、ブーツをたたき、拍手、スナップなどがみられる。従って垂直的動きが主で、躍動的ではぎれがよい。男性の激しさ、動に対して、女性の回転の静（実際は激しい動きだが）が対照的に提示される、即興性をもった新しいカップルダンスであると言えよう。

6. 踊りと結婚式

誕生、命名、結婚といった儀礼の中で、踊りと関係が深いのは結婚である。結婚式に踊る位である。私が参加した結婚式では（1980. 7. 13. Jobbágytelke 村）その村の踊りや歌の指導者でかつ仲人である人が、式一週間前に身内で不幸があったということで披露宴及び踊りへの参加を取り止めるということがあった。彼らにとって踊りは、あくまで楽しいものであるようである。

結婚の儀礼はほぼ次のように展開される。まず村役場などで登録署名をすませた後教会での式となる。披露宴会場に行くまで村中をねり歩き、ワイン、お菓子などを道ゆく人にもふるまいながら、バンドに合わせて歌が歌われる。花嫁のまわりを女の子たちが円を取り囲むこともあるが、悪魔を寄せつけないためだそうである。

披露宴は庭にテントをはった小屋で行われるこ

とが多い。まず花嫁宅で、鍋やスプーンを手にした踊りが演ぜられ、飲食が行われ、1~2時間後花婿宅へ行く。入口の前で新婦は水入りバケツを足でけりほうきでさっとはき寄せる。これは働きの妻であることを示すためで、よい子供が生まれるようにとの願いもこめられているらしい。歌なども歌われるが、頂点は真夜中に行われる“花嫁の踊り”である。介添人が先頭をきって高額紙幣を鍋に入れ花嫁と踊る。続いて両親兄弟親戚さらに友人知人がお金を出して早いチャールダーシュ（回転）を踊る。花嫁は20~30人、時には数百人の相手をする事になる。音楽もしだいに早まり雰囲気盛り上がり、花嫁自身も恍惚の状態に陥る。ただここで重要なのは、踊りの動きそのものより、踊ることそれ自体が花嫁に対するお祝いの意味を持つということである。最後に花婿が自分のものだといって踊って連れ去っていき幕となる。後はまた自由に歌い踊り話に興じる。（1980. 5月~7月に参加した結婚式の模様より）

以上にみられるように、チャールダーシュは、カルパティア盆地に古くからみられる要素を受け継いだ伝統的な農民舞踊が、貴族たちにとりあげられたことによって世に広まったものと言えよう。

ただそれには改革期という時代の流れが加味していることを見のがすわけにはいかない。

参考文献

1. György Martin; A magyar nép táncai, Budapest, 1974.
2. Elizabeth Rearick; Dances of Hungarians, New York, Columbia University, 1939, p 43
László Kósa, Ágnes Szemerkenyi; Apáról fiúra, Bpt., 1973, p 254
Irán Blassa, Gyula Ortutay; Magyar néprajz, Bpt., 1979, p 427
3. Magyar néprajzlexikon I. 1977 p 464
4. George Buday; Dances of Hungary, 1950, p10
5. Elizabeth Rearick, 前掲書 p76
6. Information Hungary, p 857-858
7. Rózsai Vályi; A Kultura világa - sport és testkultura, a tánc a világ népei, Bpt., 1965, p 400-404
8. Magyar néprajz p 433. 17C頃。現在サトマーリ地方でもみられる。
9. (3) p 467 Martin前掲書 p44
10. 非常に生活が貧しくともかなり贅沢に行われる。暴飲暴食が貧困と飢餓に対する埋め合わせでありかつ復讐行為であり、歓楽というより、身をけずる儀式の1つであった。イエーシュ・ジュラ; プスタの民 法政大学出版局 1974. p208